

# 10 . 沿岸漁業重要資源調査 (4) サザエ資源

山田英明・渡辺秀洋・太田武行・田中一孝

## 目的

沿岸漁業の重要対象種の資源生態，および資源動向の調査を行い，結果を資源管理方策の検討材料とし，持続的な漁業生産の達成に資する。

漁業予測情報を発信し，省コスト・省エネ型漁業の構築を目指す。

## 方法

a) 漁獲動向：漁獲統計を整理した。

b) 御来屋サザエ漁場内のサザエ資源

近年，サザエの漁獲量が減少してきているといわれている御来屋漁港沖から阿弥陀川沖にかけてのサザエの分状況について，漁期前の4月20日に潜水により調査を実施した(図1)。

調査地点は，昨年度と同様に名和川沖水深12m地点，富長沖水深15m地点，および阿弥陀川沖水深15m地点の3箇所とした。各調査点毎に潜水者2名で，各人1m幅で，距離10mの間のサザエを採集した(2m×10m=20m<sup>2</sup>)。併せて海藻の被度と底質についても調査した。



図1 御来屋資源状況調査地点(H21.4.20)



図2 泊漁港内サザエ稚貝調査地点(H22.3.15)

c) 泊漁港内の藻場造成域でのサザエの分布

泊漁港のクロメを中間育成している箇所では，サザエの稚貝が多く出現している傾向があったため，どの程度の大きさの稚貝が分布しているのかを把握するため，潜水調査を実施した。調査にあたっては，サザエ以外の巻貝についても採集することとし，併せて分布密度を把握するため，漁港内の被覆ブロック1個分の採集とした(図2)。

## 結果

a) サザエの漁獲動向

平成21年の県全体のサザエの漁獲量は，105トン，65百万円と昨年より量で15%，額で16%増加した。ただし，西部海域では大きく減少した地域もあり，淀江地先では45%の落ち込みとなった。一方，御来屋と泊では他の地域が減少しているに対して漁獲量が微増した。

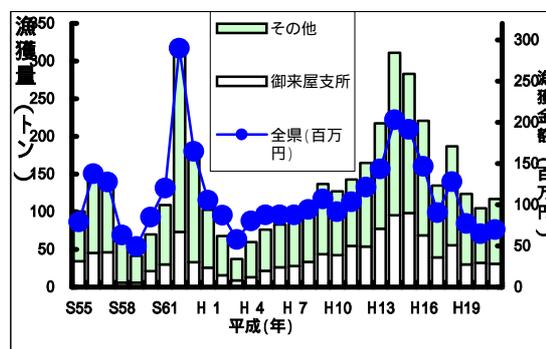


図3 鳥取県におけるサザエ漁獲量の推移 (白域は御来屋支所，黒枠はその他)

サザエは，平成14年をピークに漁獲量の減少傾向が続いていたが，平成21年は減少に歯止めがかかり，若干の上向きに転じた。全県的に漁獲動向は減少傾向にあるものの，中山，泊，および酒津地区での増加が，減少傾向に歯止めをかけたと考えられる。これらの地区では稚貝の出現が確認されており，次期漁期以降漁獲に加入してくる可能性があるため，資源的には底打ちとなったと考えられる。

平成14年以降漁獲量が減少している原因については，環境面からもさらに検討する必要がある。

b) 御来屋サザエ漁場内のサザエ資源

御来屋漁港から西側のサザエ漁場は、近年漁獲量が低迷しているため、一昨年に資源調査を実施した。その際、ワカメ以外の海藻が少なく、殻高6cm以上の漁獲サイズの成貝が極めて少ない実態が明らかになった。

表1に御来屋海域のサザエ殻長組成を示した。

表1 御来屋海域のサザエ殻長組成  
(H21.4.20)

殻高(cm)	阿弥陀川沖D15m	富長沖D15m	名和川沖D12m
1cm-	-	-	3
2cm-	-	-	12
3cm-	-	2	10
4cm-	-	3	3
5cm-	-	3	-
6cm-	1	-	-
合計	1	8	28
分布密度(個/m <sup>2</sup> )	0.05	0.40	1.40

本年度の調査においても同様に、成貝の分布が少ない状態であった。阿弥陀川沖水深15m地点では、海藻の繁茂も少なく、調査範囲20m<sup>2</sup>内には殻高6cmサザエが1個のみであった。富長沖水深15m地点では、殻高3~5cmのサザエが8個採集でき、阿弥陀川沖に比べて小型貝の出現があった。名和

川沖水深12mの地点では、漁獲サイズの成貝は確認できなかったが、殻高1~4cmのサザエが28個採集でき、他の地点に比べて稚貝の出現が多かった。同地点での海藻の繁茂は他と同様に少なかった。調査した時期は、漁前であり、当該海域では漁獲サイズ以上のサザエは少なかったものの、調査した海域の東側でより多くの稚貝が分布していると考えられることから、1~2年後には漁獲加入してくるものと考えられる。

御来屋漁港から西方のサザエ漁場では、近年、急激に不漁となっており、サザエ資源状況や餌料環境を調査した。その結果、殻高5cm以下の稚貝が多数生息していたが、水深10m以浅では、ヨレモク群落の中にクロメが点在しているものの、水深10m以深ではホンダワラ類やクロメ等の大型海藻の生育が観察されなかった。従って、餌料環境はよくないと推察された。

今後は、全県的な資源状況を把握するため、次期漁獲対象資源となる稚貝の分布について調査定点を設定する。

また、御来屋サザエ漁場において出現した稚貝が餌とする海藻について炭素同位体等を利用して何を餌料としているのか分析し、当該サザエ漁場において、漁獲が減少した原因について餌料環境面から更に精査する。

表2 被覆ブロック上面に出現した生物 (H22.3.15泊漁港西防波堤)

種類	個体数(個)	平均殻高(mm)	最小(mm)	最大(mm)	平均重量(g)	最小(g)	最大(g)
サザエ	31	46.4	13.2	73.0	31.4	0.8	82.8
レイガイ	4	22.7	14.4	29.3	2.8	0.5	5.2
イホニシ	1	27.8			3.4		
オコシダカガソガラ	16	23.2	19.4	28.3	10.2	5.9	16.7
ウラウスガイ	11	12.5	5.5	16.4	2.0	0.3	3.2
イタダミガイ	2	8.5	7.3	9.7	0.9	0.5	1.3
シリフトハチグサガイ	2	8.5	8.3	8.7	0.2	0.2	0.3
クボガイ	52	13.9	9.2	17.9	3.1	1.4	5.4
ハフウニ	44	14.0	4.3	20.2	8.6	0.2	19.9
ムラサキニ	3	16.1	4.0	39.3	60.6	0.3	179.9
イトマキヒトデ	3	54.1	51.0	59.2	40.5	36.5	43.7

c) 泊漁港内アラメ藻場造成域でのサザエの分布

泊漁港内(図 2)において、潜水時にサザエ稚貝を頻繁に観察することから、当該海域でのサザエの発生状況を確認した。

藻場造成海域の水深4～8m地点には8t型の被覆ブロックが護岸の保護を目的に多数沈設されており、当該被覆ブロックの1基の上面に生息している巻貝を全数採集した。

この被覆ブロック面には、藻場造成させたアラメが繁茂し、株の根本に多数の生物が生息している。回収した生物は、クボガイ、バフンウニ、サザエ、オオコシダカガンガラ、ウラウズガイの順に多く採集でき、サザエは殻高4cmが主体で31個出現した。また、採集できた最小のサザエは殻高1cmであり、1～2才貝が主体となって被覆ブロックに生息し、次期漁期に漁獲に加入してくると考えられる。

漁獲量が増加しない中で、稚貝の出現は朗報であり、特にアラメの藻場造成区域では、サザエの他に数多くの生物が生息し、藻場造成の成果と期待される。

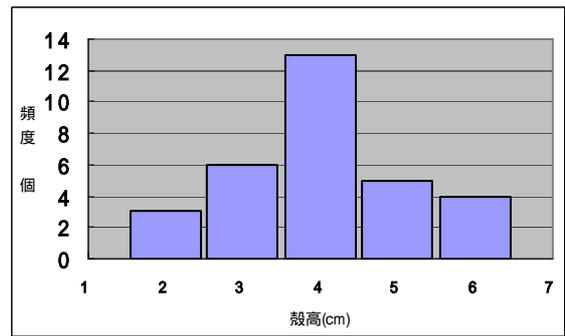


図4 泊漁港内で回収したサザエ殻長組成